

大施餓鬼法要のご案内

本年度も近隣の和尚様方にお集まりいただき、大施餓鬼法会を行います。

この大法会にて、新仏様、ご先祖のご供養、また仏教にふれる機会としていただきたいと思います。

記

八月二十五日（土）

午後2時～ 浄福寺本堂に於いて

午後二時 大施餓鬼法要

午後三時 法話（三十分程度）

供養料 一体 二千元 新仏供養 三千元

（新仏様とご先祖様の場合は五千元（塔婆二本）
申し込み書の書き方

「〇〇家先祖代々・又は戒名 申し込み者氏名」

新仏様があるお家はどなたか一人はご参加していただきますようお願い申し上げます。

何名で参加してお待ちしております。多くの方のご参加をお待ちしております。

お申し込みは22日までお願いいたします。早ければ早いほど助かります。

「小倉憲一さんがデビューされました」

直瀬出身の故・小倉真志男様のお孫様であり、政敏様のご長男、小倉憲一様が、この度十二年間の下積み生活を経て、

「えひめ憲一」

という名でデビューされました。

十代の頃より、全国のカラオケ大会などで優勝を重ねていた憲一様は、大学2年生で出場した大会で、作曲家・船村徹氏の目に止まり、弟子入りすることとなりました。

その後、内弟子として、また、付き人として船村徹氏の身の回りの世話などしながら、苦節十二年でデビューに至った次第です。

浄福寺の開基・小倉丹後守（おぐらたんごのみ）の末裔でもあります。

皆様、是非応援を
よろしくお願いいた
します。

CDは明屋書店で
販売しています。

講演会・松山連絡所
松山市東本一丁目

（089）98913431
4136

講演会 HP

<http://www.ehimekenichi.com>

演歌歌手目指す小倉さん



世話を
する小倉さん「愛媛
新聞より」



【「挨拶」】

「暮しの中の仏教語」そのようなタイトルの本を手に取りますと、「この「挨拶」という言葉が必ずといってよいほど筆頭に出てまいります。

朗らかな、人同士の触れ合いを想像させるこの語は、本来は禅道場における、師と弟子の密室の激しい問答に由来します。「挨拶」は迫る、「挨拶」も迫るという意味を持ちます。

禅問答の問いに対する答えに決まりはありません。ある僧は無言を答えとなし、ある僧は人差し指を天に向かつて立て、臨済宗の宗祖、臨済義玄は、弟子たちのあらゆる問いに対して「喝！」と叫んだといえます。

問答に答えがないように、挨拶にも答えはないはず。

いくら挨拶をしても返してくれない人もいますが、挨拶をするのを普段からよそよそしいと感じている方もおられません。私自身も声に気がつかず無視する形になっていることがあるかもしれせん。

様々な立場の、多くの方々と接する中で、相手の反応や挨拶の受け答えに一喜一憂しては何一つできません。

私たちの智恵を表している千本の腕を持つ千手観音も、1本の腕に意識がとられてしまえば、残り999本は使い物にならなくなりませう。

私が、日本の伝統仏教よりも、原始仏教に魅入られて学び、「すべての現象は妄想(空)である」などと、お話しさせていただくのも、私自身が人一倍それに対して敏感で、捕われやすいからなのかもしれません。

学んでいく中で、わかつた気になれなくなるほど、到底届かない自分自身の心との乖離に気がつき、時に苦しみは更に深くなることさえありました。

この度、長いお休みをいただきまして、様々な想いをめぐらしておりました。

千本とはいわないまでも、せつかく多くの働きを与えられて生まれてきた心です。どれだけ多くの手を自由に使えるようになるか、私の今後の課題です。

「非僧非俗」の生き方

世を捨て出家した僧という立場にありながら、立場があり、法人の経営があり、家族があり。そのどちらともいえない「半僧半俗」の身もまた、苦し

みの元です。

般若心経では、「不垢不浄、不増不減」など、相反する現象について、両方を否定することによって、否定しながら、絶対的に抜けられない肯定ともしています。

地位も価値観も感情も、すべての現象は私たちが勝手に作ったもので、妄想であると説きながら、同時に離れない(離れてはいけない)絶対的なものであると。

「僧に非ず、俗にも非ず」立場があり、経営があり、家族まである私は、本来の僧とは根本からして違います。

お釈迦様は、失うことを憂うものを、全て捨てるか、最初から持たないことをことを出家(僧)としました。

本当の悟りを求められないのであれば、「僧に非ず」しかし、求める心から離れられず「俗にも非ず」。

ただ、否定しながらも、絶対的な私自身でもあります。

「時に僧侶、時に父親、時に法人の経営者、時に・・・」こういう心が、私たち世間で生きるものが求めるべき「空」ではないでしょうか。

分かったようで、スルリと抜けてしまうのが心であります。今はこのようない一つの結論で、何か心が楽になつたような気がいたしております。

「書籍のご紹介」



「親鸞」 五木寛之 著

浄土真宗の開祖・親鸞。当時の最高の出世の道であった比叡山(天台宗)で秀才ぶりを発揮していた親鸞であったが、比叡山で智恵第一とまで呼ばれながら出世の道を捨て、貧しい人たちに「南無阿彌陀仏」の一言のみを説き続ける法然上人と出会う。

最初は比叡山の密偵として。そして十年後、真の自分を求め、比叡山の道を捨てた親鸞は、次は師弟となるために再会することとなる。

「南無阿彌陀仏とは」。南無阿彌陀仏で浄土へ行けると単純に説きながらも、その奥深い真意、自分自身に迷い苦しむ、親鸞という一人の人間。

私が最も好きな著者でもある五木寛之氏はおそらく多くの仏教書を書く中で苦しんだ自らの疑問を、親鸞という人物の中で描いたのではないのでしょうか。

仏教の真髓が描かれた作品でもありますが、親鸞という人間の私たちと同じ葛藤、そして純愛が描かれたドラマでもあります。